

大名庭園の具体相 ―栗林荘を事例として―

御厨 義道（香川県立ミュージアム）

Detailed Aspects of Daimyo Gardens: The Case of Ritsurin Garden
MIKURIYA Yoshimichi (The Kagawa Museum)

はじめに

大名庭園を研究対象とするにあたって、いくつかの観点が考えられる。思いつく限りでは、庭園景観や庭園構成を主として検討する美的・美学的視点、作庭の基盤となった思想・信仰について検討する思想的視点、利用方法や利用内容について検討する機能的視点が挙げられる。いずれの視点も大名庭園研究において欠くことができないものであり、それぞれは独立単位ではなく、相互に関連すると考えられるが、すべてを総括的に論ずることはなかなか難しい。

そこで、本稿では機能的視点から大名庭園を論じてみたい。検討素材としては高松松平家が治める高松藩の大名庭園「栗林荘」をとりあげる。

最初に高松松平家および高松藩の概略を述べておく（図1）。

高松藩は、寛永19年（1642）2月、松平頼重に対し高松12万石が与えられたことによって成立した。松平家が高松に入る以前は、豊臣秀吉の下で大名に成長した生駒親正が天正15年（1587）から讃岐国を治め、徳川政権下においても生駒家の讃岐国支配が認められていたが、寛永17年（1640）御家騒動により領知を収公された。その後、徳川幕府は讃岐国を二分し、中・東部約3分の2を松平家に与えたのである。

高松松平家の初代である頼重は、水戸徳川家初代頼房の長子として生まれたが、水戸本家を継がず、分家して大名となった。水戸徳川家二代徳川光圀は頼重の実弟にあたる。

高松松平家は初の徳川御三家分家であり、他の御三家分家よりも高い格式を与えられている。官位は初代頼重が一般大名の上に位置する従四位上少将に任ぜられたのをはじめとし、後年の当主はさらに昇進し、歴

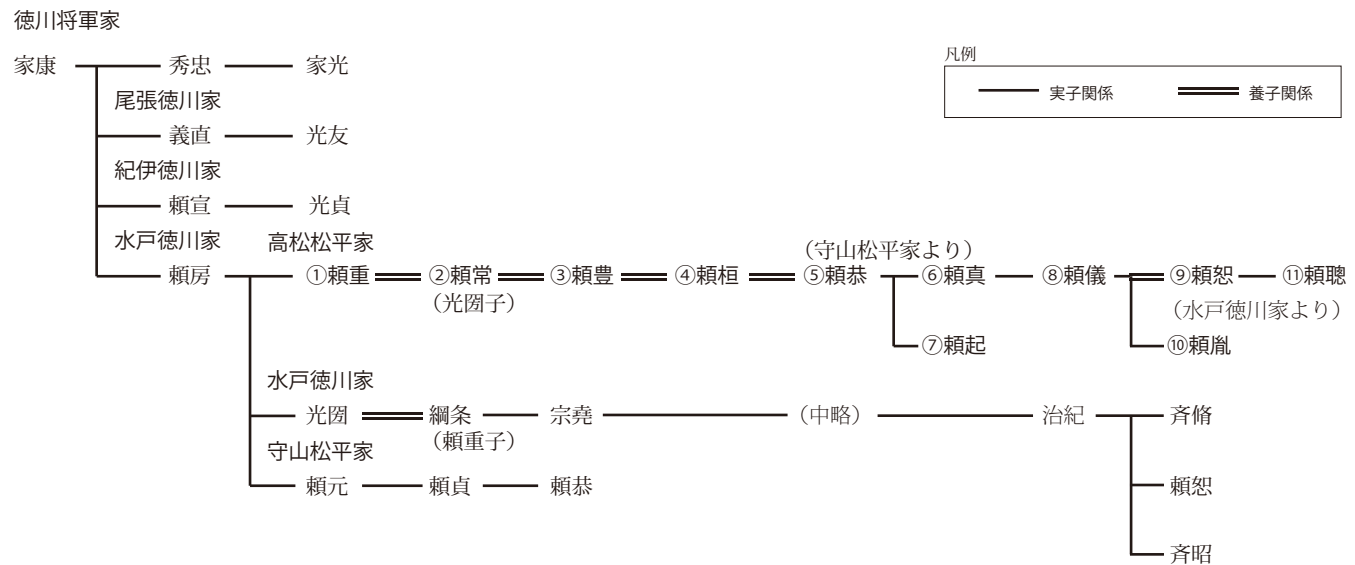


図1 高松松平家略系図

代の最高位は正四位上中將である。これは大大名加賀前田家の本来の極官を超える官位である。江戸城中においては、臣下最高の席次とされる「溜詰」を彦根井伊家・会津松平家とともに与えられ、幕府儀礼などにおいて重要な役割を務めた。

「栗林荘」は、生駒家時代に空間利用の萌芽がみられるものの、高松松平家によって庭園として整備された、国許の大名庭園である。

1. 栗林公園の概観^{1) ~ 3)}

江戸時代に大名庭園「栗林荘」であった地は、現在「栗林公園」として県の管理のもと運営されている。栗林公園は明治時代以降の改変を受けているものの、栗林荘の敷地を引き継いでおり、その概要を知ること、近世大名庭園時代を考える足掛かりとなる。

栗林公園は、明治6年(1878)の「公園」に関する太政官布告を受け、明治8年に開園する。大正11年(1922)に「史跡名勝天然記念物保存法」により「名勝」

に指定され、昭和28年(1953)に「文化財保護法」により「特別名勝」の指定を受けている。

栗林公園の位置は高松城址の南南西、直線距離にして約2.4kmのところにある。旧城下町の南端部にほぼ接し、城下の町人地の中心であった丸亀町から南にのびる通りに通じる街道に面する場所である。江戸期にはこの街道は栗林公園のあたりで讃岐一の宮である田村神社に向かう道と藩主墓所を抱える法然寺に向かう道に分岐しており、交通の要衝でもあった。

公園全体の面積は753,503㎡で、名勝としては国内最大となる。その内、586,712㎡が山林部、すなわち公園西部に位置する紫雲山で占められ、池・平地(丘陵部等を含む)は162,037㎡である。現在、山林部は観覧範囲から除かれ、公園として一般利用されているのは池・平地の部分である。池・平地部分はひらがなの「く」の字状に歪んだ長方形をしており、南北約600m、東西約285mで、南北方向に長い(図2)。

公園への出入は「東門入口」と「北門入口」の2ヶ

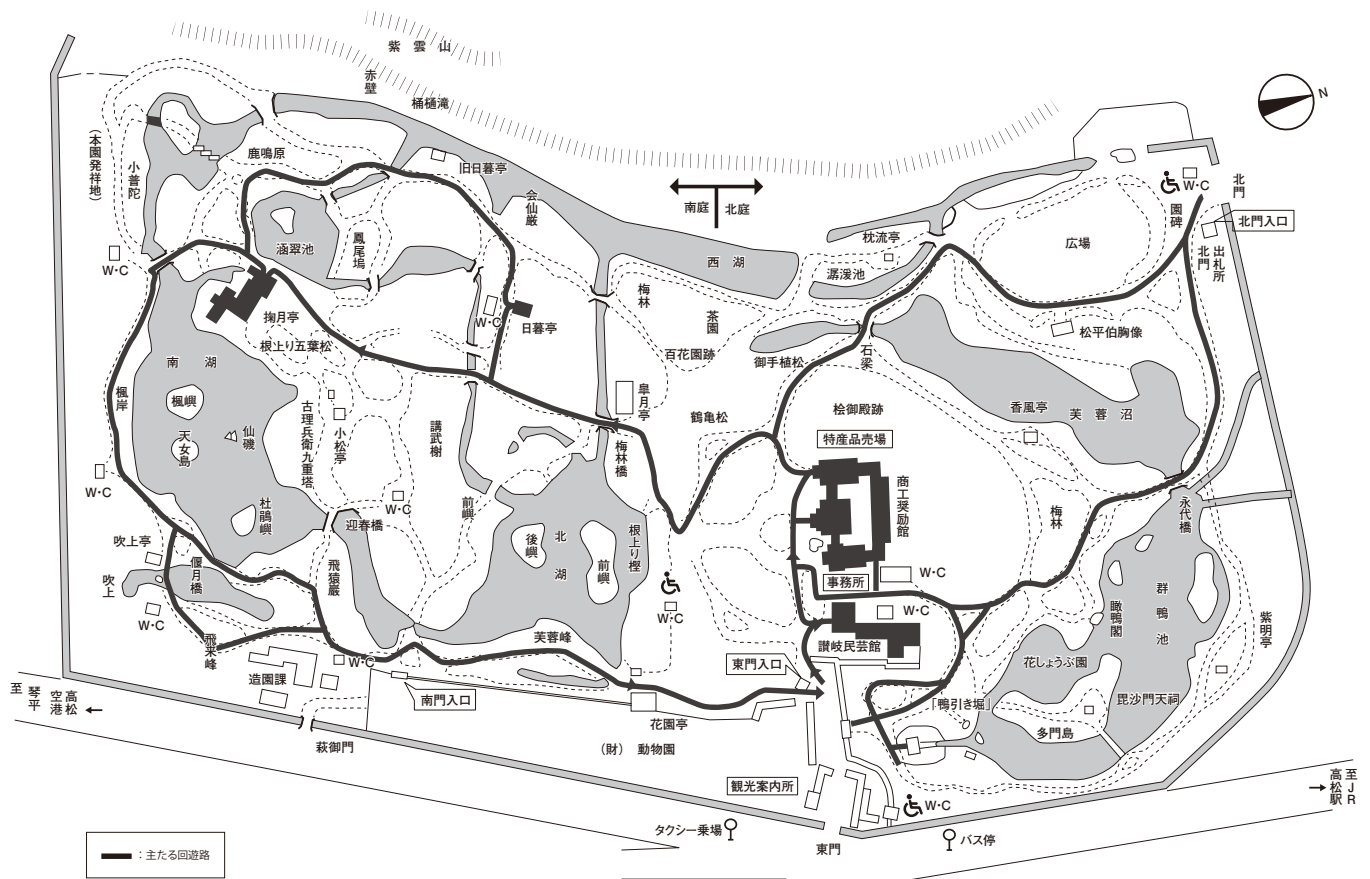


図2 栗林公園平面図

所で、国道に面している「東門入口」が現在の公園正面として位置づけられている。江戸時代、大名庭園として利用されていた際には、「北門」に該当する「嶮口」（「貝之口」と表記する史料もある）が正面入口として利用されていた。

公園はほぼ中央部分で大きく「南庭」「北庭」に分けられている。

南庭は「南湖」「北湖」の2つの大きな池を中心として構成される。「南湖」は、「楓嶋」「天女島」「杜鵑嶋」の三つの島と石組「仙磯」を浮かべ、西側に園内最大の茶屋「掬月亭」、東側に園内で最も高い「飛来峰」を備え、反り橋の「偃月橋」が掛かる。「飛来峰」の頂から「掬月亭」方向に広がる景観は公園を代表するものとなっている。「北湖」は、東に「飛来峰」に次ぐ高さの「芙蓉峰」を備え、その頂から西側をみると赤い色に塗られた「梅林橋」が映える景観を臨むことができる。南西隅には「龍睡潭」に浮かぶ島「慈航嶋」、それに掛かる雁行橋「津筏梁」、園内最古の地であると紹介される「小普陀」などがあり、「掬月亭」の西には「揺島」を浮かべる「涵翠池」がある。

「北庭」は近代になって大きく改変を受けている。近世期に御殿が所在していた場所に建つのが「商工奨励館」で、その南側は西洋庭園風に改修されている。「商工奨励館」などがある平地を囲むように所在しているのが「芙蓉沼」「群鴨池」である。「群鴨池」に浮かぶ「多聞島」には毘沙門天像を祀る祠がある。同池の一隅に発掘調査によって確認された「鴨引堀」が再現されている。

江戸時代の絵図との比較から、近代以降の改修は主に「北庭」に加えられ、「南庭」は大名庭園時代の景観をよく遺しているといえることができる。

2. 栗林荘のあゆみ

大名庭園「栗林荘」が大名庭園として本格的に整備されたのは、高松藩治世下であるが、生駒氏による讃岐国領知時代の最晩期の分限帳に「栗林掃除の者」の記載があることから、当該空間の利用は生駒家時代に遡ると考えられている（史料1）⁴⁾。また、江戸時代中期に記された地誌「三代物語」⁵⁾などには、この地が生駒家臣の佐藤道益の居所であったと記されている。

高松藩初代松平頼重が高松12万石を拝領し、初入国を果たしたのは寛永19年（1642）5月のことであるが、同年9月には栗林の地を訪れたという記録がある。入封直後の4ヶ月ほどで栗林荘の整備が行われたとは考えにくく、同地が生駒時代から一定の利用がなされていたことが裏付けられよう。その後、頼重による帰国の際の栗林への訪問は継続して行われている⁶⁾。

寛文9年（1669）、頼重は健康上の理由から主要政務を嗣子の頼常に代行させることを許され、さらに同13年（延宝元年）に隠居する。頼重の不調は万治2年（1659）ごろから始まっており、その前後から栗林荘の長期滞在がみられるようになる。寛文10年の帰国以後は栗林へ居所を移した⁶⁾。万治2年前後から栗林荘の利用様態が転換し、荘内景観にも変化があったと考えられる。この点については後述する。

延宝3年（1675）になると頼重は落飾し、栗林荘からほど近い石清尾山中に「御山屋敷」を設けて居所とした。さらに、延宝6年に「下屋敷」を建てて移り、ここが没するまでの居所となったが、この期間においても頼重はたびたび栗林荘を能楽や茶会で利用している⁶⁾。

二代頼常の時代には、栗林荘の大幅な拡大が行われる。「三代物語」⁵⁾では「節公（頼常、筆者註）に至り大いに完わる」と表され、「穆公遺訓諸役書記」（史料2）⁷⁾には「源節様（頼常、筆者註）御代御囲も広相成」と記されている。高松松平家の家譜「元祖暦代由緒」⁸⁾中に「同年（元禄13年、筆者註）十月於高松御林御庭出来」とあり、始期は不明であるが、頼常期に行われた大規模改修はこの年に完了したことが判明する。

栗林荘を描いた最古の絵図である「御林御庭之図」⁹⁾は（図3）、端裏書に元禄13年（1700）の年紀が記され、「元祖暦代由緒」の示す年代と一致することから、改修完了を契機として作成された絵図と考えている。絵図は遠近や実距離を無視した描き方がなされているため、栗林荘全体の形状は不明確であるが、後年の絵図で確認される主たる池泉、丘陵、島嶼などの地形要素が表現されており、この時点で栗林荘の規模はほぼ確定していることを読み取ることができる。

「増補穆公遺事」¹⁰⁾によると、頼常による栗林の普請は飢饉対策であったという。大凶作の年に領民を日雇として使役し、賃銭を与えて栗林荘の改修にあたら

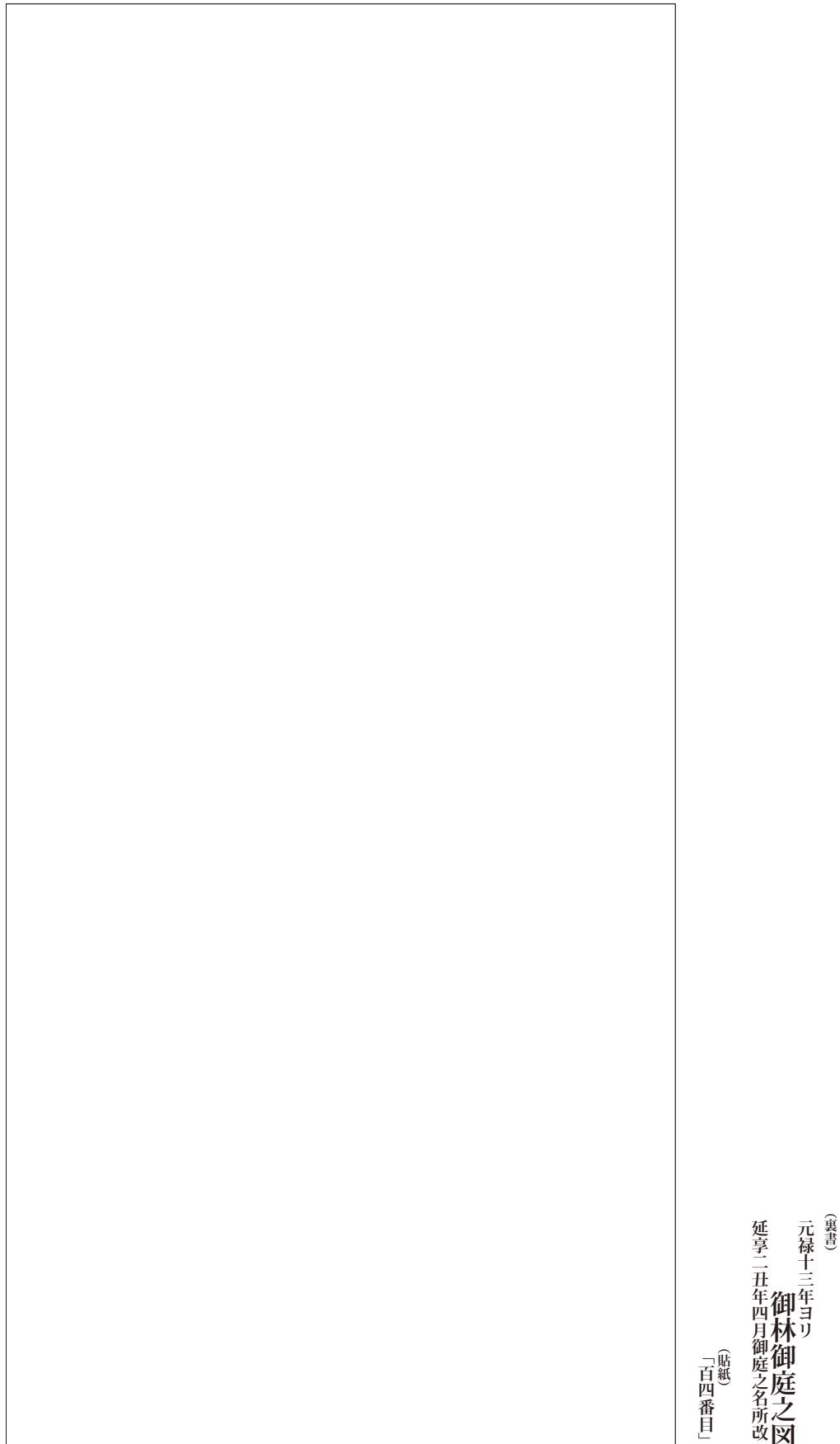


図3 御林御庭之図 瀬戸内海歴史民俗資料館蔵（松浦正文庫）

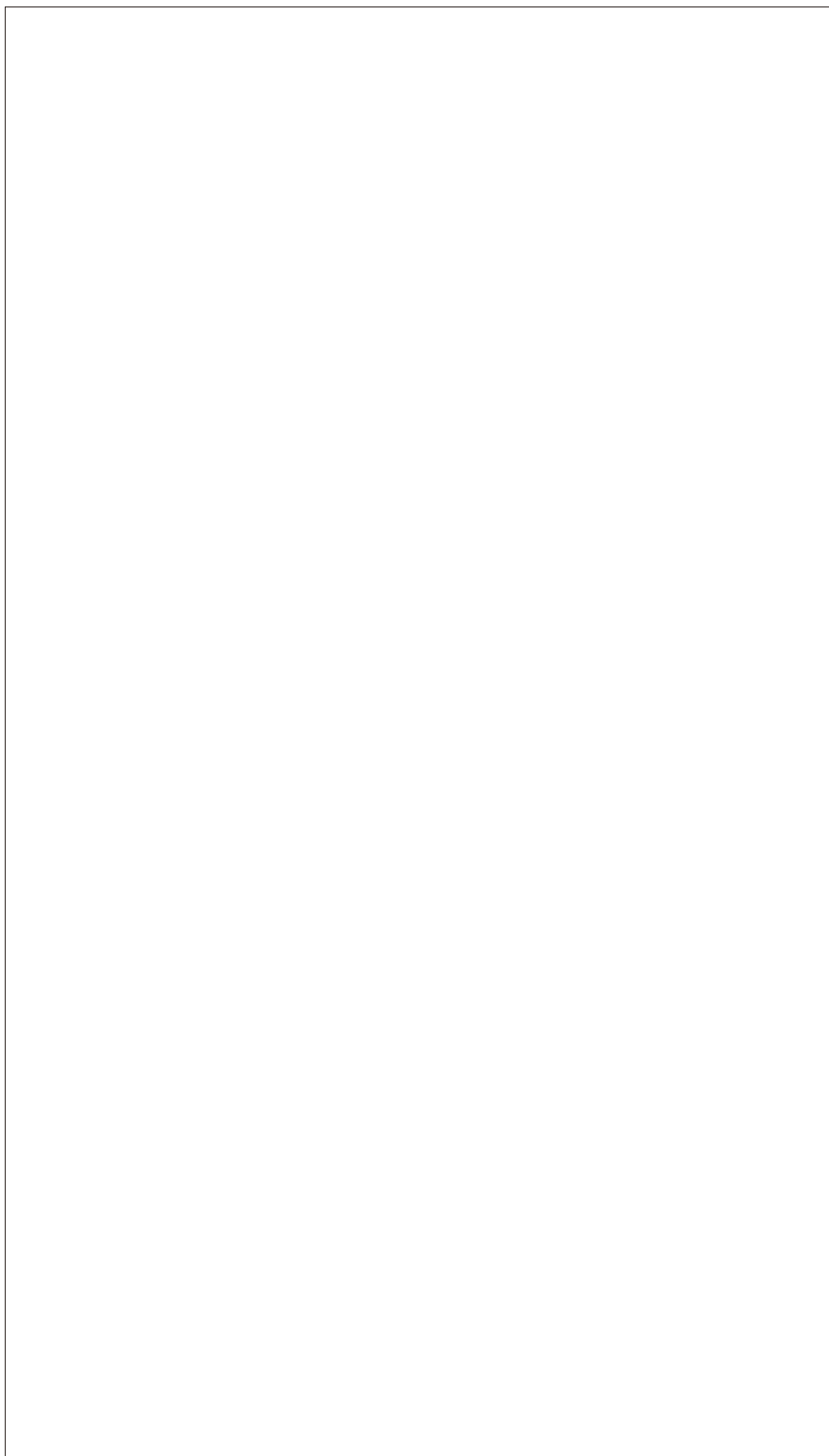


図4 栗林古図 香川県立ミュージアム蔵 (栗林公園旧蔵資料)

せ、これによって領内の餓死者が出なかったと記されている（史料5）。

三代頼豊は栗林荘を愛好し、宝永元年（1704）の藩主就任後から訪問・滞留を繰り返し、宝永7年には荘内の「屋形」に「奥居間」「表居間」を新築して居所と定め、表向については諸役所等も設けた（史料6）¹¹⁾。頼豊は政務の一部を栗林において執り、藩士への通達等が栗林にて行われたことがいくつかの史料で確認される。一方、「佳節式日等帰城」¹¹⁾と記録にあるように、すべての政務が栗林で行われたのではなく、城において執り行われる必要があるものも存在していた。頼豊が拡張した「屋形」は次代の頼桓になると縮小された⁷⁾。

五代松平頼恭は、四代頼桓の急死にともない守山松平家（水戸徳川家分家）から養子に入り、元文4年（1739）に高松藩主となった。就任間もない延享元年（1744）の帰国に際し、自らも加わって栗林の改修にあたり、「名は実の賓にして実ありて名無ければ実また亡ぶ（原漢文）」（史料8）¹²⁾として、旧来の名勝名を引き継ぎつつ、栗林荘内の名を持たない名勝を含めた各場所の名付けを儒臣中村文輔に命じた。そして、荘内の詳細を記した長文の「栗林荘記」¹²⁾を記させるとともに、「御林御庭所々此度御名御改」が行われたこと、「御用向」にあたってはこの名が用いられることを通達した⁹⁾。この時定められた名勝名の多くは現在も引き継がれている（図4）。

頼恭はさらに栗林に改修を加えている。寛延元年（1748）には石清尾山麓に設けていた薬園を栗林荘内に移転し、人参その他の薬草育成にあたらせている。本草学をはじめとする多分野で才能を発揮した平賀源内も一時期ここに勤めたことがある^{10), 13)}。

宝暦11年（1761）頃には「北湖」と「西湖」をつなぐ水路を掘らせ、「高橋」（現「梅林橋」）を掛けている。この改修は「増補穆公遺事」では船による荘内回遊を可能にするためと説明されている（史料9）¹⁰⁾。私見を付け加えるならば、この水路は、寛延元年に荘内に移転された薬園（史料上は「梅木原薬園」と表記する）を東西方向に貫くかたちで設置されている点から^{10), 14), 15)}、薬園の植物類を育成するための水源としての機能もあったと考えてよいであろう。

時期は特定できないが、延享2年（1745）から宝暦11年（1698）頃までの期間に、「南湖」と「北湖」の間に位置する「講武榭」中に設置されていた調馬場である「愛駿榭」が「芙蓉峰」の東麓に移転されている^{16), 17)}。

延享2年の荘内名勝名の確定と頼恭以後大きな改修が行われなかったことをもって、頼恭期に「栗林荘の完成」が成ったとされている。栗林荘のあゆみを大まかにとらえると、頼恭期が大きな画期を成していることは間違いないが、頼恭以降も改編・改修は加えられている。

「赤壁」対岸に所在した「憂玉亭」が移転して「南湖」と「北湖」の間にある平地の一隅に移転して「扇屋茶屋」となり、「南隈」に注ぐ溪流沿いに位置した「孝榮亭」が「会僊巖」よりやや東に入った場所に移転して「日暮亭」となった。

建造物の移転の他、「涵翠池」に浮かぶ「揺島」が南岸と地続きとなり、九代松平頼胤の時代の嘉永3年（1850）には「群鴨池」に鴨猟を行うための鴨引堀が設置されるなど、地形にも改変が加えられたことが分かっている¹⁷⁾。その他、記録等で確認されていない改変も多く加えられたと推測され、江戸時代を通じて栗林荘はその様相を変え続けた。

3. 空間利用のあり方からみる 栗林荘の具体相

（1）「武」の空間としての栗林荘

大名庭園は趣向をこらした地形構成や植樹、建物構成によって成り立っていることから、文芸・学芸や美術・芸能といった「文」の分野からとらえられることが多いように思われる。ここでは視点を変え、「武」の空間としての側面から栗林荘について考察してみたい。

最初に着目するのは栗林荘初期の展開過程である（表1）。結論を先取りすると、高松松平家初代頼重の段階で、栗林の地は「武」の空間から「文」の空間へ転換をとげたということである。以下、その点について具体的にみていく。

先述のとおり松平頼重による栗林訪問は非常に早く、初入国を果たした年の9月には早くも栗林荘に「調馬」すなわち馬術訓練の目的で訪れている。続い

表1 栗林荘初期の利用状況

和暦	西暦	月	日	事 項
寛永 19 年	1642	9 月	15 日	遊栗林荘調馬
		12 月	11 日	至栗林荘、公親試刀〔以国光切一之胴、以高田切脇毛骨、以信国切二之胴、以兼光切一之切出、以冬廣切八枚安次〕
		12 月	26 日	至栗林荘、親試刀劔〔以雲次切一之胴、以高田切弱腰〕
正保元年	1644	12 月	27 日	於栗林荘、親斬罪人
正保 3 年	1646	7 月	18 日	放鷹、至栗林
		12 月	16 日	至栗林荘、放鷹、至石清尾
慶安 4 年	1651	2 月	22 日	遊獵、至栗林
承応 2 年	1653	6 月	2 日	観調馬〔新馬場・大番士〕、遂至栗林荘、以鳥銃、獲青鷺、又於新馬場、与侍臣為鞭打
		6 月	14 日	至栗林荘、自放鳥銃、打鳥
		6 月	19 日	至栗林荘、以鳥銃、打鳥、観侍臣劍術、至石清尾山〔観陶器〕
		閏 6 月	6 日	至栗林荘〔観陶器〕
承応 3 年	1654	4 月	5 日	至栗林荘、以鳥銃、打青鷺
明暦 2 年	1656	閏 4 月	2 日	至栗林、鳥銃獲鷺
		5 月	14 日	至栗林、獲青鷺、遂陶窟、観造陶器
		8 月	18 日	至栗林○看調馬〔馬場〕
		11 月	8 日	至栗林、遂遊獵
明暦 3 年	1657	8 月	8 日	至栗林荘〔鳥銃打蒼鷺〕
万治元年	1658	5 月	8 日	至栗林荘〔滯留〕
万治 2 年	1659	1 月	11 日	至栗林荘、留 38 日
万治 3 年	1660	11 月	11 日	御林へ御出御滯留 15 日【英公外記】
寛文元年	1661	1 月	29 日	御林へ御出御滯留【英公外記】
寛文 2 年	1662	9 月	6 日	設猿楽〔栗林荘 18 日・27 日同〕
		9 月	14 日	賜齊食、於妙朝寺・慈恩寺・法昌寺〔栗林荘〕
		9 月	25 日	設猿楽〔栗林荘、使老中・奉行人・小性頭觀之〕
		10 月	3 日	設猿楽〔栗林荘〕
		11 月	26 日	有猿楽〔栗林荘、使老臣觀之〕
		12 月	5 日	有猿楽〔栗林荘、使僧徒觀之〕
		12 月	15 日	有猿楽〔栗林荘〕
寛文 4 年	1664	3 月	28 日	世子本丸ニ移ル、公栗林荘ニ居ル
		5 月	26 日	有猿楽〔栗林荘○徒目付以下、至医者觀之〕
		閏 5 月	2 日	有猿楽〔栗林荘○3 日・10 日・12 日同〕
		7 月	18 日	有猿楽〔栗林〕
		8 月	26 日	有猿楽〔栗林荘〕
		11 月	2 日	於御林被音楽仰付〔一越調音取、胡飲酒・陵王・還城楽〕、大老・年寄・番頭・奉行并渡邊主税聴聞被仰付、鶴之御料理被下
		12 月	4 日	有猿楽〔栗林荘〕
		12 月	21 日	至栗林荘
		12 月	22 日	賜饗〔鶴〕於諸臣〔小性頭・用人、至横目〕、有猿楽〔世子及公子頼母、亦来〕
寛文 6 年	1666	5 月	25 日	使老中・番頭、観栗林荘〔賜饗〕
		9 月	21 日	至栗林荘〔留至 12 月 21 日〕
		10 月	2 日	有茶会〔老臣至奉行○5 日同〕
		10 月	9 日	有猿楽〔11 日・18 日・21 日・26 日同〕
		11 月	1 日	有猿楽〔令群臣觀之〕
		12 月	3 日	至栗林荘、賜饗〔鶴〕於群臣
		12 月	15 日	有猿楽
		12 月	22 日	至栗林荘〔留 6 日〕
		12 月	24 日	賜饗〔鶴〕於群臣、有猿楽
寛文 8 年	1668	10 月	8 日	有猿楽〔栗林荘〕
		10 月	9 日	有玄猪式〔栗林荘〕
		12 月	1 日	有猿楽〔栗林荘○9 日・15 日同〕
寛文 10 年	1670	4 月	23 日	公移栗林荘〔糸姫同○是後公常在栗林〕
		6 月	9 日	使老臣至横目及医者、観菜圃〔於茶亭及涼所、賜麴瓜〕
寛文 10 年		11 月	18 日	武器庫成〔栗林〕

て、その年の12月に3度にわたり、栗林において頼重自らが刀剣をとって試し切りを行っている。寛永19年12月11日の「英公実録」記事は以下のとおりである。

栗林荘ニ至リ、公親カラ刀ヲ試ス〔国光ヲ以一之胴ヲ切ル、高田ヲ以脇毛骨ヲ切ル、信国ヲ以二之胴ヲ切ル、兼光ヲ以一之切出ヲ切ル、冬廣ヲ以八枚安次ヲ切ル〕⁶⁾

(原漢文、〔 〕は細字双行)

試し切りは死罪人の死体をもって行われた。文中の「国光」「高田」は刀工名をもって刀剣の名称としたもので、「一之胴」「脇毛骨」などは試し切りの部位を示す用語である。この日頼重は5振の刀剣を用いて、5回にわたって試し切りを行ったのである。12月26日には、2振の刀剣で2回の試し切りを実施し、翌日にも「親カラ罪人ヲ斬ル(原漢文)」との記載が確認される。

初入国以降、頼重は帰国のたびに栗林訪問を重ねているが、その目的は先の馬術訓練のほか、鷹狩(「放鷹」)、狩猟(「遊獵」)、鳥撃(「放鳥銃」等)などである⁶⁾。これらは遊興的な要素もあるが、武術訓練に通じる行為としてみなすことができる。また、承応2年(1653)には家臣の剣術披露を栗林で観ていることも注目される。

このように高松藩成立初期における栗林荘は、専ら武備・尚武を目的とした利用がなされていたのである。

この利用内容が万治2年(1659)を境に大きく変化する。この年は頼重の体調不良が表出しだした時期にあたる。9月23日には幕府への勅使との対礼式があったが「疾有り登城せず(原漢文)」⁶⁾と病気を理由に登城を休み、27日にも同じ勅使の饗応が江戸城において行われたが、「疾未だ愈えず、登城せず(原漢文)」⁶⁾と病状が回復せず登城を休止している。この時の頼重の年齢は37歳で、加齢に伴う体調不良とは考えにくく、何らかの病気にかかったものと考えられる。

その後も断続的に登城を休止しており、病床につくまでに至らないものの不調が続いていたとみられる。寛文4年(1665)には頼常(実は水戸徳川家光圀の子)を嗣子として立てる許しを得、寛文9年(1669)には、軍役や藩政などの主な政務を嗣子の頼常に代行させる

ことを幕府に願い許可されている⁶⁾。

この時期の頼重による栗林荘の利用状況で注目されるのは長期滞在である。万治元年12月に栗林荘に「滞留」(期間不明)し、さらに翌年1月には38日間にわたって「滞留」していることが記録から確認される⁶⁾。それまでの頼重の栗林荘利用は基本的に日帰りの泊程度であり、「滞留」と記録されるような滞在形態はこれが初めてのことである。その後も万治3年(1660)、寛文元年(1661)の「滞留」が確認される¹⁸⁾。

頼常を嗣子とすることが決定した寛文4年の帰国時には、頼常を高松城へ住まわせ、頼重は栗林荘へ移っている。この段階では時に城に戻ることもあったが、寛文10年(1670)4月には栗林荘へ常住することを決めている⁶⁾。寛文4年以降、延宝3年(1675)に「山屋敷」へ移るまでの10年間については、頼重の中心的な居所は栗林荘であった。

万治元年(1658)および翌年の「滞留」を機に、栗林荘の利用内容も一変し、「猿楽」上演、音楽鑑賞、茶会などが催されている。それまでの利用内容が「武」に関わるものであったのに対し、その対極に位置する「文」関連のものへと転換しているのである。逆に馬術訓練や鳥撃といった行為は、これ以後記録上に現れなくなる。

こうした利用内容の転換に伴い、栗林荘内の景観も変化している。栗林荘常住を決めた翌年の寛文11年(1671)、頼重は嗣子頼常の礼を荘で受けるが、その場所は「表書院」となっている¹⁸⁾。また、延宝元年(1673)8月には、主だった家臣を栗林荘に招き「御庭拝見」をさせた後、「志水之茶屋」で「御料理」を供している(史料3)。

「英公外記」¹⁸⁾に年月不明の頼重発給文書として、万一国替があった場合の指示を記した奉行宛の覚が記載されている(史料4)。文中で嗣子頼常のことを「右京」と称していることから、頼常が「右京」を名乗る寛文2年(1662)1月26日⁶⁾以降のものと判断できる。この文中から栗林荘内に「長つほね」「少つゝのちや屋[茶屋]」「角屋敷」「中屋敷」「山手のちんじゅ[鎮守]」「さき松の下之ちんじゅ」が存在することが知られる。

このように、書院や屋敷、茶屋など、万治期以前の「武」を目的とした利用とは路線を異にする建造物が栗林荘内に設置されているのである。栗林荘が頼重の中心的な居所へと変移するに伴い、公式空間としても機能する様相を整え、また景趣を楽しむ場としての要素が加えられていったとみることができよう。

では、その後栗林荘は全く「文」の空間に転換してしまったかというところではない。頼重期では、万治期以降しばらく「武」的要素が影をひそめているが、寛文10年(1670)に栗林荘内に「武器庫」が設けられていることが確認できる⁶⁾。

二代頼常期において栗林荘の規模が拡大されたことを先述した。頼重期の栗林荘の規模を知る資料は確認されていないが、頼常期の栗林荘の姿を描いた「御林御庭之図」⁹⁾に手がかりがある。

栗林荘において目に付く「山」は「飛来峰」と「芙蓉峰」であるが、これらは元禄13年(1700)「御林御庭之図」⁹⁾ではそれぞれ「古富士」、「新富士」と記載されている。この名付けから考えると、「古富士」は頼重期からすでに存在し、頼常期に入って「新富士」が築かれたと推定される。さらに推定をすすめると、「新富士」と組み合わせて景觀をなす「北湖」もその時に築造されたものではないかと考えられる。

そのように推定した場合に、注目されるのが、「南湖」と「北湖」の間にある「馬場御殿」「矢場御殿」である。他の大名庭園の事例をみると、馬場などは園地の周縁部に設けられる場合が多い。文武の機能を空間的に分離するという目的であろう。栗林荘の場合、景觀の主要部分を成す「南湖」「北湖」を分断するような位置に所在している点が特徴的である。これは頼重期の栗林荘から追補するかたちで頼常期の拡大が行われたが、その際「馬場御殿」「矢場御殿」の位置は変更されなかったと判断されよう。頼重期の初期において、荘が武備空間として利用されていたことを鑑みると、これらの施設の位置変更が行わなかったのは意図的なものであると考えられる。

ここで「御林御庭之図」と並んで江戸時代前期における栗林荘の様子を知る数少ない史料のひとつである元禄17年の「栗林荘記」(史料7)²⁰⁾をみてみたい。次のような一節がある。

④大慈大悲之閣を高处に厝き、一觴一詠之場を広庭に開くは、衆とその楽を同じくするため也、⑤セイ(偏「正」旁「鳥」)鵠を設けて以百中之妙を試み、騏驎を走らせて以五御之歩を節するは、安に居て危を忘れざらんため也

(原漢文、④・⑤の記号は筆者が便宜上付した)

④は信仰施設(観音堂や祠、「大慈大悲」は仏の広大無辺の慈悲を表す仏教用語)や酒杯を傾けながら詩を詠ずる文芸施設(茶屋等)について述べ、「楽」を享受する空間としての栗林荘を表している。それに対置するかたちで⑤は弓術場(「セイ鵠」は弓の的を表す)や馬術場(「五御」は馬を操る五法を表す)での習練について述べ、安寧の中においても危機に対する認識を保ち続けるための空間として位置付けている。つまり、栗林荘の機能において「文」と「武」が等価対置されていることが示されている。このように「栗林荘記」を解すると、「馬場御殿」「矢場御殿」が景勝地の中に所在する意味が見えてこよう。荘内景勝の中に武技習練の場が置かれたのは、園地の展開過程で偶然に発生したものではなく、意図的・積極的な行為であったと考えられる。頼重期初期にみられた「武」の空間としての機能は次代に継承されているのである。

「馬場御殿」「矢場御殿」はその位置が変更されず、江戸時代中期の頼恭期まで継承されていることが、延享2年(1745)の「栗林荘記」¹²⁾の記述によって確認される。同書の中では「馬場御殿」「矢場御殿」は、まとめて「講武榭」という呼称が与えられている。

頼恭期まで「武」の空間としての機能が一定程度継承されていることは、次に掲げる「増補穆公遺事」¹⁰⁾の記事からも窺うことができる。

其後死刑之科人有之、栗林の御庭にて御手自ら御刀タメシ(偏「金」旁「非」)被遊候思召にて、御道具蔵より可切刀五腰[同田貫三本、祐定二本]出て、切柄も出来候て入御覧候所、御好有て仕直指出候

頼恭は死罪人の死体で自ら試し切りを行おうと道具蔵より刀剣を選び、試し切り用の「切柄」を自分好みに制作させている。実際には家老の進言によって頼恭自身による試し切りは中止となったのだが、試し切りの場所が栗林荘となっている点に注目したい。栗林荘

における試し切りは、初代頼重に共通する行為であり、荘の「武」の空間としての機能の一端がこの時点まで継承されているのである。

その後、馬場と矢場を有する「講武榭」は、馬場の機能が分離されて荘内の東縁部に移転され、「矢場」としての機能を残した「講武榭」はその後消失する。さらに「講武榭」があった空間の一隅には茶屋である「扇屋茶屋」（「憂玉亭」を移転、変名）が設置される^{18), 17)}。これらの改変の時期を明確にする記録は確認されていないが、頼恭期以降、栗林荘における「武」としての空間機能は暫時衰退していったとみることができる。

以上みてきたとおり、栗林荘はその初発において「武」の空間として利用されていた。このことは高松松平家の入封以前に讃岐国を治めていた生駒家の栗林の地の空間利用に規定された可能性がある。その後、頼重の静養・隠居地としての利用を契機に、「文」の空間としての利用に転換、施設についても整備された。「武」の空間としての機能はそれによって失われたのではなく、次代以降も継承され、その下限は頼恭期すなわち宝暦・明和ごろまでに設定できるのである。

高松松平家における栗林荘の機能転換過程が一般的であるとはいえないが、大名庭園が武家である大名の手によるものであることを改めて想起すると、大名庭園の発生と展開を考える上で「武」の要素からの視点を逃すことができないことを示す事例として重要であると考えている。

（２）江戸時代後期の栗林荘における領民の庭園見物

大名庭園が領民に対して公開される行為は先行研究によっても提示されているところであるが、高松松平家における御庭拝見の事例について紹介、検討してみる。

大名とその一族以外の庭園利用の事例としては、家老以下の家臣へ庭園見物許可がある。頼重期にその事例は確認され、寛文２年（1662）９月に行われているのが、記録の上ではその最初であろう⁶⁾。頼重が栗林荘で猿楽を催し、家老やその他家臣が観劇するというかたちで栗林荘が公開されている。

一方、領民の庭園見学の事例については、江戸時代後期まで下ることになる。高松藩については藩政史料等が比較的乏しく、確定することは難しいが、現在の

ところ文政10年（1827）の庭園見物が記録上確認できる最初の事例ということになる。

この時に行われた「御林御庭拝見」は、高松松平家八代頼儀の治世下である文政元年（1818）に賦課された御用銀、御借銀を提出した者に対して実施されたものであった²¹⁾。

他藩においても同様であるが、江戸時代の高松藩財政は窮乏しており、その解決策のひとつとして領国内に対して御用銀、御借銀が課せられている。御借銀は返済を建前とした徴収とされていたが、実際の返済については明確にならない。その後の藩の動向や財政状況を踏まえると、そのほとんどが返済されなかったと考えるのが妥当であろう²²⁾。

文政４年（1821）、頼儀が隠居、九代松平頼恕（水戸徳川家出身、水戸八代治紀子で水戸九代斉昭の兄）が藩主に就任する。「御借銀」賦課は八代藩主による施策で、「御林御庭拝見」は九代藩主による措置ということになる。「御借銀」賦課から９年経過しての「御林御庭拝見」であり、かなりの期間が空いているが、先に述べたように「御借銀」への返済が実現していないことが背景にあると考えられ、前代に実施した賦課対象者の不満を緩和するための政策であったことが看取される。

文政10年の「御林御庭拝見」について記述がある「藤性植田氏由緒 全」（史料10）²¹⁾によると、「拝見」を許された者は、一旦城下に集まり、栗林荘へ罷り出て、大御茶屋（荘内最大の茶屋「星斗館」のこと、その一部が「掬月亭」として現存する）にて、酒・吸物・肴が振る舞われ、その後庭園を拝見したと記されている。

「藤性植田氏由緒 全」には、天保８年（1837）にも「御林御庭拝見」があったことが記されている。この時の理由は、文政11年（1828）に給付の証文が発給された現米を藩に献上したことへの対応であった。つまり、藩の財源不足充当への協力に対するいわば返礼として行われたのである。この時の「御林御庭拝見」については、阿野郡北青海村の渡辺家に伝来した「御用日記」²³⁾にも記録がのこっている。それによると、この時の拝見の対象となった者は、阿野郡北だけでも寺院や大庄屋、庄屋、牽人・帯刀人など計33人で、領内全体にするとかなりの人数にのぼったと思われる。そのため、時間をずらして数回にわたって拝見が

行われている。

いずれの「御庭拝見」も、藩財政の財源補填と関わっている点が注目される。藩主から領民に対する慈しみをもたらす「仁政」の一環として庭園見物が行われるのではなく、経済的な提供に対する無形の褒賞として庭園見物が利用されている。協力した側の経済的な負担は解消されないが、名誉が付与されることによって一定の満足を得る効果をねらったものとみられる。植田家では由緒を明らかにする家譜に記されており、「御林御庭拝見」は家の名誉として捉えられているのである。

「藤性植田家由緒 全」²¹⁾ や「御用日記」²³⁾ からは具体的な「御林御庭拝見」の様子を窺うことはできないが、若干の事項を見出すことができる。

拝見にあたっての服装について、上位の者は麻上下、下位の者は羽織袴の着用が指示されている。藩が栗林荘を、格式を有する場として位置付けていることが分かる。拝見の際に入口として指定されているのは「切手御門」である。この門は現在の東門付近に位置していた。藩主が栗林荘を訪ずれる際には、現在の北門付近に該当する「嶮口」が利用されており、荘内への入り方においても大名とそれ以外では厳然たる区別が行われていた。こうした措置は、特別な空間として栗林荘を演出する役割を果たし、そのことが拝見における荣誉感を高める効果をもったと考えられる。

補足として述べておくと、「藤性植田家由緒 全」や「御用日記」の記事からは、この時どのような経路で庭園を見物したのかは不明であるが、延享2年の「栗林荘記」¹²⁾ には、「嶮口」を出発点として「星斗館」を終着点とする経路が記されるほか、切手御門（「栗林荘記」では「東門」とする）を出発点とする「星斗館」への経路も示されている。文政・天保の「御林御庭拝見」ではこの経路が利用されたのではないだろうか。

高松藩における領民の大名庭園見物は、財政難対策の一環として位置付けられるものであった。庭園の存在は政治的・経済的な動きの中でも利用されていたのである。

おわりに

高松藩の大名庭園である栗林荘を素材として、その

成立過程を概観し、具体相として庭園の「武」の側面、政治的利用について検討をしてきた。

成立過程を追うことにより、栗林荘が段階的に形成され、基盤となる地形や景観は継承されながらも、一方で大名家当主の意向により変遷を重ねてきたことを示した。このことは大名庭園を、ある一時期の庭園相をもって静態的に評価検討することに一定の担保が必要であることを示している。研究する上で、流動的、動態的な庭園相にも留意を要するであろう。

大名庭園がもつ「武」の側面については、高松藩の事例を全大名に敷衍することはできないが、多かれ少なかれ各大名庭園において見出される要素であろう。大名庭園の武備的あるいは軍事的な役割といった視点から見直すことにより、新たな研究展開が期待できるのではないだろうか。

また、担い手となる大名が政治的・社会的存在である以上、その産物である大名庭園にも政治的・社会的な意味が付与されるのは必然的な結果である。本稿で指摘した栗林荘における領民見物における財政再建策との関わりはその一端を示すものとして位置付けられよう。

ここで提示した機能面における指摘事項が庭園景観や構成などにどのように影響、関連したかについて考察することができれば、大名庭園への理解はより深まることになるのではないだろうか。

蛇足ではあるが、本稿で論ずることができなかったが、これまでの検討の中で気づいた栗林荘の機能、役割に関わる論点を提示しておきたい。

初代松平頼重は、隠居所としていた栗林荘を離れた後も、荘を利用している。その際には当主より「借り受け」と記されている。これは大名庭園が大名家産としてどのように位置付けられているのかを考える上で重要であろう。

また、三代頼豊は栗林荘を在国時の常駐の場としたが、佳節式日における儀礼に際しては帰城している点も注目される。大名の執政空間としての庭園の限界が示されると同時に、城の意味を示唆するものとしてとらえられよう。

さらに、栗林荘の大改修を行い、名勝名を確定させた五代頼恭は、完成度が高く、豊富な内容をもつ魚類、

鳥類、植物の博物図譜を制作させている。自らも標本採集・収集を行ったほどの博物学大名であり、頼恭による栗林荘内への薬園設置はそうした動向の中に位置づけられるべきものである。頼恭が行った諸事業の中に栗林荘に関わる事項をどのように位置付けるかは、個としての大名の事蹟における庭園の意味という研究視点を提供するものであろう。

【註】

- 1) 『特別名勝 栗林公園 図録』栗林公園観光事務所発行、2013
- 2) 『特別名勝 栗林公園』栗林公園観光事務所発行、2000
- 3) 『特別名勝栗林公園掬月亭保存修理報告書』栗林公園観光事務所編集・発行、1994
- 4) 西嶋八兵衛「寛永拾六年三月朔日 生駒家士分限帳」、個人蔵資料。
- 5) 「三代物語」香川県立図書館旧蔵資料、香川県立ミュージアム蔵。
- 6) 「英公実録」高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム蔵。
- 7) 「穆公遺訓諸役書記」『香川県史 9 近世史料 I』香川県、1988に翻刻掲載。
- 8) 「元祖暦代由緒」高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム保管。
- 9) 「御林御庭之図」松浦正文庫、瀬戸内海歴史民俗資料館蔵。
- 10) 「増補穆公遺事」松浦正文庫、瀬戸内海歴史民俗資料館蔵、香川県教育委員会編集『新編香川叢書史料編(一)』同書刊行企画委員会発行、1979に翻刻掲載。
- 11) 「恵公実録」高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム蔵。
- 12) 中村文輔作「栗林荘記」延享2年3月成立、高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム保管。
- 13) 上田三平著・三浦三郎編『改訂増補日本薬園史の研究』渡辺書店、1972
- 14) 「栗林古図」栗林公園観光事務所旧蔵資料、香川県立ミュージアム蔵。
- 15) 「栗林図」高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム蔵。
- 16) 「栗林公園古図」栗林公園観光事務所旧蔵資料、香川県立ミュージアム蔵。
- 17) 御厨義道「栗林荘関連絵図について」『ミュージアム調査研究報告 第5号』香川県立ミュージアム発行、2014
- 18) 「英公外記」高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム蔵。
- 19) 「高松松平氏歴世年譜」高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム蔵。
- 20) 菊池武雅作「栗林荘記」元禄17年2月、「翁嫗夜話」高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム保管等に所収、前掲註3)に翻刻掲載。
- 21) 「藤性植田家由緒 全」植田律子資料、香川県立ミュージアム蔵。
- 22) 『香川県史 4 近世 II』香川県、1989
- 23) 「御用日記 天保八年」讃岐国阿野郡北青海村渡辺家文書、香川県立ミュージアム蔵。

【参考文献】

- 1 松浦正一『高松藩祖 松平頼重伝』松平公益会編集・発行、1964
- 2 藤田勝重『栗林公園』学苑社、1974

史料1
西嶋八兵衛「寛永拾六年三月朔日
生駒家士分限帳」
(個人蔵)

史料2
「穆公遺訓諸役書記」 抜粋

(香川県史9 近世史料Iより転載)

史料4
「英公外記」

(高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム蔵)

御殿
高松市南町端
右者 御代々様御下屋敷ニ而御屋形向有之、御囲松並木
竹藪ニ而御座候、源節様御代御囲も広相成、其後
源惠様御代御屋形向段々広被 仰付候、源惠様ニ者御
在國中過半右之御屋形ニ被成御座候ニ付、奥表共御居間
等御座候、表向者諸役所等迄も御座候、御庭所ニ御茶屋
三四ヶ所も出来、御庭者石清尾山を御囲入組結構成御庭
ニ而御座候、源惠様ニ者御城ニ被成御座候而、折々
御日帰りニ御林江被為入、其節者御庭之御茶屋ニ被成御
座、御滞留者不被遊候 思召ニ而御屋形向過半壊取、
外御用ニ遣ひ申候而御居間畳表計残、其分ニ者 常久院
様御姫様方被成御座候

史料3
「英公外記」

(高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム蔵)

英公外記
寛文十一年辛亥公五十歳 正月朔日朝、殿様御長袴、御林へ御出、
御太刀・折紙御持参、年寄部屋ニ而御控、追付 公御裏付上下表御書
院御上段御着座、殿様御太刀を御上段へ御指上、於ニ之間御礼被仰
上、戸田十郎左衛門御披露仕、畢而 殿様上段へ着座御至事有之
延宝元年癸丑公五十一歳 八月十一日、大久保主計・谷平右衛門・大
須賀小兵衛・久米六郎左衛門・稲田主米・三宅十大夫・戸祭五郎左衛
門・大森式部・大久保主馬・成田内匠・間宮九郎左衛門・岡田藤左衛
門被為召、御庭拜見被仰付、志水之茶屋ニ而御料理被下候、取持人竹
井葵庵・奥山碧庵・武田義庵・笹山宗閑、給仕小性組(十二日、西尾
縫殿・角田修理・大久保右衛門八・白井所左衛門・山田十右衛門・大
森勘解由・加藤勘右衛門・緒方伊右衛門・寛助左衛門・加藤弥左衛
門・渡辺主税 十三日、榎本太郎右衛門・大久保次郎左衛門・寛善
右衛門・発知吉兵衛・芦澤水之助・松平甚左衛門・笠井次郎右衛門・
浅見五郎兵衛・牛窪半之丞・戸田三吉・入谷小三郎・河合平之丞 廿
三日、法然寺・蓮門院・浄願寺・広昌寺・法昌寺・慈恩寺・阿弥陀院・
勝法寺 右何れも御庭拜見被仰付、於志水之茶屋御料理被下候」

〇年月不知、万一御御替有之候ハ、如此可取計旨、御自筆ニて奉
行朝比奈甚五兵衛・緒方伝兵衛・八木弥五左衛門へ被下候御書付写
【奉行所旧記】

覚

一、本丸、右京居申たる所之おく方之分計こほし候こと
一、二ノ丸おく方不残こほし候事
一、二ノ丸より東ノ丸へかよひ道石垣なおし、へいをかけ可申事
一、三ノ丸へい下之かりらうかなおし可申事
一、栗林、長つほね井少つゝのちや屋とも、次角屋敷・中屋敷之家
とも不残こほし申候事
一、栗林、山手のちんじゆ井さき松の下之ちんじゆくづし、本尊持
参可申候事

一、かみなりの間不残こほし可申候事
一、くわんふのちや屋こほし候事
一、引田山のちや屋こほし候事、但、町なみの所ハ其まゝおき候事
一、のう崎ちや屋こほし候事
一、浄願寺にて源威様・榮照院殿・皓月院のいはい所、とりはらひ
可申候事
一、広昌寺の御玉やとりはらひ可申候事
一、克軍寺ハ其まゝさし置可申候事

八木弥五左衛門
緒方伝兵衛
朝比奈甚五兵衛

史料5 「増補穆公遺事」

（松浦正一文庫、瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）
※『新編香川叢書史料編（一）』（昭和五四年）
翻刻掲載

一、(前略)且又上文に 節公下民を御救ひの義御意御座候に付、穆公の御事にはあらねとも、伝へし有難き御事故に筆の序に記す、昔 節公の御世に大凶年有て下民多く飢に及んとす、公思召立給ひ、栗林の御庭普請被 仰出、下民老若男女日雇に御遣ひ、夫々相応に賃錢被下、堀を堀て山を築しむ、夥數御失布の由、依之餓死者なかりしと云り、古は百姓とも飢人帳に付事を甚るる風俗にて、申出さる者間々有之しとなり、近比迄も其風俗伝りにしに、享和の比、教諭有て此風俗ゆるみしと聞ゆ、将又右御泉水の水、後代の今に至る迄、年々民の助けと成る事不少、御明君の御計ひ難在事ならずや

史料6
「惠公実録」

(高松松平家歴史資料、香川県立ミュージアム蔵)

宝永七年庚寅〔時三十一歳〕

(五月)

廿四日、至高松○拝祠堂○往親量院・長寿院館

廿五日、詣克軍寺・淨願寺・広昌寺・靈源寺○往栗林

廿七日、於栗林、有移徙式〔奥居間新成〕

(六月)

十五日、拝祠堂○群臣朝見○移栗林、有移徙式〔表居間新成、自是後 公常居栗林、每佳節式日等煇城〕

史料7 菊池武雅作

「栗林莊記」 元禄十七年二月

※『特別名勝栗林公園内掬月亭建物並びに庭園修理工事報告書』

昭和四〇年より転載）

謂之府城、曰三松、背海而南向。其地方不足二里而觀者覺其翠峯踞蹕。陟陴者曰：石清尾山。八幡靈宮巋然起於其中。東南之麓其外闢々而內瀉者、曰栗林。大君能經營之以爲優游憩閑之處、諸衛之帳有司之座具々舛而微。櫺以周牆限以重門。雖金谷之園午橋之莊庸可共比世而度短長同一年而視廣狹乎。於是別其境之區有閭閻今茲々有林有園譬分吾々有泉之際亦有池之澗澗堂之奧也館之大也可以群焉亭之幽也樹之小也可以息焉。所謂掃山・週月・漱玉・洗心・棲鸞・流鶴・隨風・桜雪・殊形詭制每各異觀。歷大慈大悲之閣高處、開一顰一歎之場於広庭者、与衆同其樂也。設鴝鵒台於百中之妙、走下麒麟以鎔三五御之步聚、居安不忘危也。兩乃列其景之品則漣花・洗心竹・養魚聚・螢・迎新月於涼牀・聽飛雪於風檐・食康老而子規啼南靡靜而北燕來。嗚咽滴々白鳥驚々聚・雲散・雪落之官春也。鉅露・秋霜者紅葉之染也。彼洛之牡・雉揚之巧、陶之菊・連之梅、漢川之箭・東陵之瓜、梁侯之八稜柿、泥山七寸之柑、百種千名于何不有。含芬吐芳布衣菜垂陰。春秋之遊必有方。朝暮之觀得無雷同。若夫移一蛟岨之棧則巴蜀之險可想而見之。象一富山之形則秦華之靈可推而測之。石之怪者如垂輪如虎之窟。松之奇者如偃蓋如童之婦。微雲催雨柱礎先濡、輕風度石潭壙石相觸於此何如。豈於彼揚柳或香簾而不見蘭或繁紉而不能階。載星出王戴星言燭猶未烈其勢鬱鬱曉難得而繼。爾其坐花於春・侍月于夕則鼓笛湧觴豆・陳舞者更休・醒者又酌不能酌不能舞者求其友各於其黨離恨晨光之熹微不能至東方之既白・君臣極和知足而止・樂土々々樂園々々只君子之父母。

元祿十有七年歲次甲申二月之吉

注1 西南方

5 くつろぐ

6 丸い峰

9 武技を

13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849

17 こまかく

×又は××の箇所活字なく似た意味の字を挿入し、□は活字がないので空欄とする。

史料 8
中村文輔作

「栗林莊記」延享二年三月成立

※『香川県史 9 近世史料 I』より転載

三萬六千頃，朝廷七十二峰，徒有小小之弁而已矣。（卷之二）甲子之夏公薨，自東都聽治之暇，常從侍臣遊于此，躬先園丁斧，塞斤，閱獲，極嚴於桑，弄，得奇勝於林間竹中，而淡濃談密，盡得其所矣。公曰：名實之實，實而無名，名實亦亡，乃命。有勝無名者，凡十七，仍曰者十三，於是乎先公之布置復如新，以文輔嘗与斧斤之役，辱得縱觀苑中勝，故命文輔作之記。臣文輔頓首，々々再拜，寅祝曰：美哉守之在德而遊亦与，政，故樂治斯歌，詠，舞，歌，詠，踏，舞，不足，斯有遊焉息之所。是以台池鳥獸賢者而後樂，以彼一時文雅風流，如鬼園闌台，欄川西園，尚風詠以伝之，圖画以旣之，勝々乎人耳目也。李德祐戒其子孫曰：壽平泉者，非我子孫也，以二草一木与人者，非三佳子弟也。又，託，故守之以德遺之，以政則木石其焉往，嗟其子孫終不能守之，不唯二草一木，醒酒石拳爲他人有焉。我先君英公，草創之，至節公，布置初具，惠公又潤色之，伝之懷公，伝至今，百有餘年矣。一草一木亦与國共榮，遠矣哉。德之及子孫，豈独子孫而已哉。民衆其來二百年如一日，今公潛心文學，銳意政事，常爲士民先，又伝之無窮，萬斯年猶是。

延享乙丑春三月

讚藩侍読臣中村文輔頓首再拜謹記

史料9 「増補穆公遺事」

(松浦正一) 文庫、瀬戸内海歴史民俗資料館蔵
※『新編香川叢書史料編(一)』(昭和五十四年) 翻刻掲載

一、採葉と号秋冬春、南は安原の奥、東は阿波境、西は金毘羅山限に、薬園方・草木方其外御小性共に五六人、奥横目老人指添、初は平賀源内、後は池田玄丈・深見作兵衛頭取して、或は五日或は七日逗留にて罷越、葉は勿論珍草・珍木数多堀取、晩々に根認致、高松へ差越、夫々植付申候
一、栗林中梅木原に馬行大に結廻し薬園出来、池田玄丈頭取に命ぜられ、中間の引除もあり、御小性、薬園方番を作て日々参り手入致候、掛りの外も毎度人別に蒙 仰手伝に参候(後略、人参栽培について)

一、西御丸開地も済し後、又御林へ移り、古富士の前の池水を西の岸下の池へ切流し、梅木原薬園を東西へ堀抜て、御泉水船の通路して御庭を廻る様にと思召付にて、度々此所へ御出、御小性其外西丸へ出来りの者とも不残罷出候、此節は中間式人此に増相働申候、右堀抜にて南北往來の通路絶申候に付、高石垣して其上に橋掛り高橋と名付申候、扱彼堀抜土を南へ運び、薬園の南に小山を築立申候、御出無之日も誰々参れと時々御下知にて度々罷越候、後は冬に至り薄氷の中を堀上致成就候、其後は御林内所々の御掃除初り如形の御出数度御座候

(参考)

〔源穆様御代由緒書〕(鎌田共済会郷土博物館蔵)

一、私儀延享三寅年九月、岩清尾塔山之南麓二有之候御薬園御預被成、手入被仰付候而、御中原一人御借渡被下候、寛延元辰年頃より御薬園御林之内へ引候様被仰付、度々引申候

(竹内庸夫「旧高松藩の薬林薬園」上田三平著・三浦三郎編『増補改訂日本薬園史の研究』渡辺書店、昭和四十七年掲載史料)

史料10 「藤性植田家由緒 全」

(植田律子資料、香川県立ミュージアム蔵)

文政十戌年九月十三日

植田半太

右去ル文政元寅年、御用銀御借銀別段被仰付、致出精 上納相済 寄特之事候、依之 御林御庭拜見被 仰付、御酒・御吸物被下候
右之通前年酉十一月廿五日被 仰渡相成、尚日限之儀者追請可被仰聞旨被申聞有之候処、翌年九月十一日、紺屋町年寄右明後十三日朝四ツ時麻上下着用仕、町内年寄宅罷出候様申参候二付、致承知候段、返答致置候、右刻以前年寄宅罷出候様申参候二付、御林内罷出 切手御門内御中門之外、控居候様、追刻御庭内罷通候様被申聞候二付、罷出候様、於大御茶屋御酒・御吸物・御肴三種、御酒頂戴仕候、并右畢御赤飯等頂戴仕相済、御庭向不残拜見仕候事

但、右二付、御出役御奉行久米族殿・御町奉行吉原三八殿・町与力朝倉十左衛門・物書北条喜八郎、右いづれも頂戴之席正為挨拶被罷出候、尚御庭向拜見之案内、同心中被相勤之事

右二付、為御礼御町奉行向家・町与力三人并書役北条喜八郎宅にも罷越之事
天保元寅年十月廿六日

一、酒三升

南紺屋町罷在候衆人

植田半太

右去ル文政十亥秋、御買米之儀被 仰付候様、御時節相共、代銀頂戴不仕、米指上候段、寄特之事候、依之右之通被下候

右之通於御町奉行所、算又蔵殿列座、町与力朝倉十左衛門申渡有之、右御酒頂戴仕之事
天保六未年春

一、元米宅石五斗納升

文政十一子年御証文被下置候御現米辻

内五斗五升五合

田地御年貢米之順、二張七厘之割を以

残九斗四升五合

如斯引米相成被下方相掛申候

年々御渡米相成分、如此

天保六未年十一月十三日

一、先達被下置候御現米不残指上可申旨被 仰付二付、指上之事

天保八酉年五月廿日

植田半太

但、不快二付、名代同人次男

植田小太郎

右者先達被下置候御現米手形指上二付、来ル廿二日 御林拜見被 仰付候間、朝四ツ時麻上下着用仕、丁内年寄迄罷出候様申来候二付、右刻

以前年寄宅罷出候様、町内組頭同道仕、御林内罷出、切手御門内御中門之外、控居候様、追刻御庭内罷通候様被申聞、於大茶屋御酒・御吸物御肴三種頂戴仕、并右跡、御赤飯等頂戴仕相済、御庭向不残拜見仕之事

但、右二付、御出役御奉行寄木村旦殿・御奉行吉原半蔵殿・御町奉行鈴木善兵衛殿・御勘定奉行日下義左衛門・町与力朝倉十左衛門・瀬尾久右衛門・物書北条岩蔵、右いづれも頂戴中為挨拶、則頂戴仕候様迄被罷出候、尚御庭向拜見之案内、同心藤沢専助相勤之事、右為御礼御町奉行向家・町与力三人・北条岩蔵宅にも罷出之事